

金を借りても逃げればよい ラオスコffee栽培地域にみる貸し手が負う社会

箕曲在弘 みのおありひろ / 早稲田大学、AA研共同研究員

ラオス南部のポーラヴェーン高原に広がるcoffee産地には、高利貸しもするcoffee仲買人がいる。この高利貸しは農民を搾取する悪しき人々なのだろうか。貸付の状況を観察することから、別の姿が見えてくる。

「高利貸し？」の仲買人

プーモン村に住むレーさんは、自らcoffee農園をもちながら、coffeeの仲買もしている。仲買人は周囲の農家からcoffee・チェリー（coffeeの果実を指す）を買い取り、自分のピックアップトラックで輸出会社に運んで売却する。売却額と買取額の差額が儲けになる。レーさんは仲買人としては中規模くらいだが、収穫期には毎日自分の村を中心に周囲の村々を巡回し、農家に呼び止められたら、車を止めて、農家が収穫したばかりのcoffee・チェリーを計量する。支払いは即金だ。

レーさんは村長経験者で、村の有力者である。そんなレーさんは、村人が困ったときに現金を貸し付ける。利率は月8%。年ではない。「月」なので、金を借りた農家は1年後にほぼ倍の額を返済しなくてはならない。銀行の融資は年利14%程度なので、彼は高利貸しにみえる。この地域の仲買人の貸付は、誰でも月8~10%の利子を取る。私たちの社会でいうと、仲買人の貸付は誰でも借りられる消費者金融と同じよう

なものだ。

緊急援助の意味あいをもつ 仲買人の貸付

発展途上国の農村社会では、こうした「高利貸し」は比較的多くみられる。銀行の融資は手続きが煩雑だし、親族に借りるにしてもみな貧しければ簡単には借りられない。農家は月給制ではなく、農産物売ることで収入を得ている。だから、天候不順による収量低下は現金不足を招く。ポーラヴェーン高原の中心部は、1990年代くらいまで焼畑で陸稲を栽培していたが、焼畑が実質的に禁止となり、今では換金作物のcoffeeばかりが植えられている。この生活環境では現金がなければ主食のコメさえ買えない。人々は現金の枯渇を一番恐れている。

この状況でレーさんの融資は、農民にとって緊急支援の意味あいをもつ。農家が緊急に現金を必要とするのは、たいてい医療費の支払いのときである。健康保険が普及していないこの地域では、民間の医療機

関に入院する場合、症状によっては彼らの年収と同程度の医療費がかかることがある。ラオス国内の医療機関で対処できない場合は、隣国のタイの病院に入院することもある。この場合も莫大な費用がかかる。医療費だけではない。学費や日々の食費の工面など、さまざまな理由で急に現金が必要になることがある。coffee農家がどうしても借しなければならぬ理由がある場合、こうしたレーさんのような仲買人に頼るしかない。

「高利貸し」はつらいよ

このようにレーさんは高利で融資をしているのだから、大儲けをしているのではないかと勘繰りたくなる。実際、レーさんは村の中でも比較的大きな家に住んでいて、周囲からは「金持ち」とみられている。彼は村人の中で「高利貸しで大儲けしている」という噂が立っており、周囲からあまりよく見られていない。だが、彼の話をよく聞いてみると、彼の収入はcoffee栽培と仲買によるところが大きく、金貸しはリスクが高いという。

2018年時点で、レーさんが融資していた村人は3人だけだった。以前は10人くらいいたが、返さない人がいるので、徐々に貸さなくなったのだそう。ある村人は2016年に1000万キープ（約15万円）を借りたが、その後、coffeeの収穫期に雲隠れしてしまった。そもそも仲買人による貸付の返済時期は、必ずcoffeeの収穫期になる。この時期でないと農民は手元にまとまった現金がないからだ。農家は返済額に相当するcoffee・チェリーを仲買人に受け渡すことによって「返済」する。これが



*写真はすべて筆者撮影。

仲買人による買取の様子。ずた袋を一つひとつ計量する。



coffeeの収穫の様子。完熟の果実のみを手で摘み取る。



一番確実な返済方法なのだ。だが、レーさんによれば、この村人はこともあろうに一番忙しい収穫期に、一家全員で北部の親戚の家に「逃げて」しまったらしい。その後、しばらくして村に戻ってきたものの、レーさんは「何度か行ったけど、『金がない』と言いつけるので、もう取り立てに行かなくなったよ」という。

要は借金を踏み倒されたわけだ。これは珍しいことではない。レーさんは他にも数人、返済していない村人がいるという。だから、今では貸付の人数を減らしている。実は同様の話を私は他の場所でも聞いている。ノンレ村の村長のラートさんも、「以前は何人かに貸していたが、返済してくれないので今は数人に絞っている」と言っていた。町に住む商店経営者のカイさん、ソーンさんも、2010年に私が集中的に仲買人の調査をしたときに同じことを言っていた。こうした語りからわかるのは、「返済しない農民」「借金を踏み倒される仲買人」は、この地域にはどこにでもいるということだ。

貸付を拒否できない社会的圧力

とはいえ、読者は不思議に思わないだろうか。

うか。そんなに返済が滞るのであれば、もう貸さなければいい。貸したところで損をするのは仲買人である。実は、仲買人は周囲の農家からの期待に応えなくてはならない社会的圧力が働いているため、貸付を完全には断れないのである。

この地域の人びとは金持ちであれば困っている人に貸すのは当然だと考えている。農村という土地に縛られて集住している人たちのあいだで貧富の格差が広がり、一部に大儲けする人が生まれれば、周囲の人たちからの嫉妬が強まるため、冠婚葬祭の際に村人たちに相応の金銭的還元が期待される。村の金持ちには寛大さが求められるのである。金持ちは周囲からの期待に応えないと、「あいつはケチだ」という村人からの悪評判がすぐに村中に広まり、金持ちの家族は村にいつらくなる。自分の資産を保持したければ村を出るか、村人たちとの交流を断つか、どちらかの選択肢しかない。これらの選択をしないのであれば、村に残る金持ちは困った村人たちに貸付をして、返済されなくても相手を許す態度をとるようになる。

貸し手が負う社会

この態度は、どこか立場が逆転しているかのように見える。私たちの社会では借



森のなかのコーヒーの木。日光が直射しないので日中でも涼しい。

り手の立場が弱く、返済していないことに負目を感じ、自発的な返済義務を負っていると考えがちである。だが、この地域では、貸し手のほうが劣位におかれているかのように貸さざるを得ない状況に追い込まれている。ここで貸付を断り周囲の村人から悪評判が立てば、仲買人は農家からコーヒーを売ってもらえず、重要な収入源を失ってしまう恐れがある。農村では仲買人の取引相手となる農家とは取引以外の様々な情緒的関係で結ばれているため、これを無視してコーヒーの売買はできない。

つまり、彼はコーヒーの買付の成否を村人にかけているのである。本特集の河野の記事にある「リーダーに負う社会」と「リーダーが負う社会」という分類を援用すれば、この地域は「リーダーが負う社会」に近い。厳密に言えば仲買人は地域の有力者であるとはいえずリーダーではないので「貸し手が負う社会」というべきだろうか。

金持ちである状態が農家に対する負目となるのは、農村の人びとの平等志向の強さに由来する。金持ちになりたいという志向があるのと同時に、みなと同程度の経済状況であることに安心するとき、誰かが抜きこんで金持ちになれば嫉妬のまなざしを向けられる。金持ちである仲買人は、こうしたまなざしを受けることで、倫理的な負目を感じる。

この地域では借り手が自発的に返済することはなく、貸し手が無理に返済を迫ることもない。金持ちが貸すのは当然という状況において、経済的な負債をおう者は必ずしも負目までおうわけではないのである。むしろ倫理的な負目をおうのは、経済的に裕福な貸し手のほうである。コーヒー農村でのフィールドワークは、負債/負目の複雑な絡まり合いを解きほぐす事例を提供してくれる。



コーヒーの収穫の様子。籐製の籠に摘み取った果実を入れる。



収穫した完熟のコーヒー・チェリー。